

## 36 両化八幡神社の荒神祭 りょうけはちまんじんじゃ こうじんさい

### 一 名称

両化八幡神社の荒神祭（地元での呼称：荒神祭）

### 二 文化財指定等の状況

未指定

### 三 伝承地

世羅郡世羅町小国地区（旧世羅郡世羅西町小国、旧世羅郡小国村）

※同様の荒神祭は世羅町一帯で広く行われている。

### 四 上演の機会及び場所

小国地区では、地区内に祀られる荒神などの神々に対して、七年に一度の周期で式年祭が奉納されている。地区全体による祭りではあるが、祭儀は地区内に鎮座する両化八幡神社と中央大宮神社、特にその神楽殿で交互に開催される。近年は、三月半ばの日曜日の朝から夜にかけて実施されているが、昭和四十四年までは十一月の二日間の開催で、夕方から翌朝にかけて夜通し神楽を奉納していた。

地元の資料によると、近年は以下の場所と日程で荒神祭が開催されてきた。

○両化八幡神社：令和七年三月十六日、平成二十三年三月二十日、平成九年三月十六日、昭和五十七年三月二十一日、昭和四十四年十一月十五日～十六日。

○中央大宮神社：平成三十年三月十八日、平成十六年三月二十一日、平成二年三月二十五日、昭和五十一年三月二十八日、昭和三十七年十一月十九日～二十日。

### 五 行事次第、芸能の構成、演目、芸能その他

#### イ 行事次第、芸能の構成及び演目

##### ■ 祭礼全体の行事次第

○三月二日（日）九時～一六時 準備（龍巻き・荒神幣製作）

地区住民約四〇名が両化八幡神社に集合し、藁を綯ったり編み込んだりして、雌雄一对の「藁龍（わらたつ）」二体、「ホゴ（今回は十四年前に作ったものを再利用）」二つなど、祭りで使用する祭具を制作。神楽殿に幕を張り、藁龍を神楽殿に巻き付け、ホゴを取り付ける。なお、「スボ（荒神幣）」七〇本は、後日役員が制作した。また、舞殿の天蓋は神楽太夫（備後神楽社中）に制作を依頼した（本来は地元が作成するものだろう）。

○三月十六日（日）一〇時～一八時三五分 荒神祭・神楽奉納

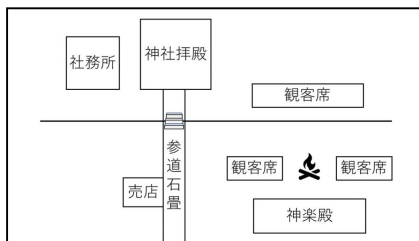
雨模様の中、両化八幡神社にて、地区住民によりテント設置など会場準備が進められ、若連中による売店も設けられた。神職二名、神楽太夫八名も参集し、神楽殿や神楽道具の準備を進める。準備が整うと、お盆に徳利と茶碗を載せた神職と氏子総代長が神楽殿へ赴き、神楽太夫と車座で酒を飲みかわしながら打ち合わせをする（外部から招いた神楽太夫への饗応儀礼）。



藁龍作り、組子を編み顎を作る(事務局撮影)



神楽殿と神楽を見物する観客



荒神祭会場の模式図

次第・時間	①人数 ②衣装 ③採物 ④音楽	内 容
1 清米の舞 10:00～10:25 (25分)	①2人 ②烏帽子、狩衣、袴 ③鈴、舞幣、扇 ④太鼓1、笛1、手打鉦	舞場と一同を清めるための儀式舞。2人の舞手が幣と鈴を持ち、座って鈴を振りながら神歌を歌う。続いて立ち上がり一差し舞った後、座って神楽師全員で祓いの神歌を唱えて拍手してから、再び立ち上がり舞う。
2 勧請の舞 10:25～11:10 (45分)	①2人 ②烏帽子、狩衣、袴 ③鈴、平幣、扇 ④太鼓1、笛1、手打鉦	全国の神々を舞場に勧請する儀式舞。2人の舞手が座って鈴を鳴らしながら神々の来臨を請う神歌を歌う。続いて立ち上がり一差し舞ってから、神名帳を手に舞場を廻りながら、神名を延々と唱える。日本国中の一宮をはじめ、備後国、世羅町、小国地区の神々と範囲を徐々に狭めていき、最後に「当所荒神70社」と述べる形で、さまざまな神々が勧請される。
3 祭典(神楽殿) 11:20～11:50 (30分)	①2人(斎主1、祭員1) ②白装束、立烏帽子 ③笏、祓串、玉串 ④太鼓1、笛1	地区民の安全を祈願する祭典。斎主・祭員、小国地区4社の総代長、神楽太夫が舞場に昇殿し、修祓、斎主拝礼、祝詞奏上、玉串奉典(斎主、祭員、両化八幡神社・中央大宮神社・菅原神社・祇園神社各総代長、神楽太夫代表)、斎主拝礼の順に祭典を執り行う。終了後、神酒を飲み交わす直会がある。
4 五行祭 12:00～16:00 (4時間)	①8人 ②烏帽子、狩衣、袴、シャグマほか ③王子幡、扇、刀、弓矢ほか ④太鼓、笛、手打鉦	「五行祭(王子神楽)」は、神楽太夫による言い立て(口上)中心の演目。世界創生神である盤古大王の五王子による所務分けの争いとその調停を題材に、陰陽五行説に基づく世界秩序のあり方が語られる。 備後神楽の演じ方の特徴は、演者間における即興で丁々発止のやり取りが多く、エンターテイメント性の高い話芸により物語が進められる点である。そのためすべてを演じると七～八時間にも及ぶ。今回は以下の前半部が演じられた。 ①盤古大王の山出、②后との別れ、③遺産分配、 ④四王子の山出(次郎・三郎は省略)、 ⑤四王子の談合、⑥五郎王子の山出、⑦弓場の弓術指導、 ⑧后宮の訪問、⑨五郎王子の四王子訪問
5 造花引き 16:00～16:20 (20分)	①1人 ②格衣、袴 ③なし ④太鼓、笛、手打鉦	造花を揺り動かすことにより、勧請した神々を遊ばせて神威の活性化を図る儀式。舞台の下手に正座した神楽太夫が、造花の由来を神歌によって唱えながら、造花に結び付けられた縄を引く。始めはゆっくりと上下させ、後半は造花を上下左右に激しく揺らす。
6 剣舞 16:20～16:55 (35分)	①4人 ②シャグマ、鉢巻、袴 ③鈴、搔付幣、扇、剣 ④太鼓、笛、手打鉦	剣の威力により邪気を祓う舞。四人が鈴と搔付幣を持って円座になり、鈴を振りながら五方の神々を請ずる神歌を唱える。立ち上がり、扇と白幣を持って剣の由来などを語る神歌を唱えながら輪になって舞う。続いて剣を採り、互いに隣の舞手の剣先を掴んで、輪になったり、刀くぐりや刀跳び、回転などをしたりと、曲芸的な所作を行う。舞い終わると円座になり、4人で御神酒を頂く。
7 悪魔祓い 16:55～17:15 (20分)	①1人 ②鼻高面、黒シャグマ、赤単、鎧、袴 ③扇子、刀 ④太鼓、笛、手打鉦	氏子の災いを打ち払う舞。鼻高面をつけた舞手が、始めは両手に扇を持って舞い、猿田彦との名乗りのもと「悪魔祓仕らばやと存じ候」と宣言する。続いて袴掛けをして扇と刀を持って舞う。最後に両手に扇を持って舞い、その場で何十回も急回転するキリキリ舞で舞納める。
8 能舞「八重垣」 17:10～17:55 (45分)	①4人(素戔鳴尊、松尾明神、大蛇2) ②面、狩衣、袴ほか ③扇、鈴、刀、提灯蛇胴、酒樽ほか ④太鼓、笛、手打鉦	八岐大蛇退治を題材とした能舞で、素戔鳴尊(=荒神)が主役のため、荒神祭によく舞われる。素戔鳴尊の出雲国下向、(爺・婆・姫との対面の場面は省略)、松尾明神の酒造り、大蛇退治、天叢雲剣を得るという構成。最後に素戔鳴尊が「三宝荒神にて七ヶ年千代に八千代に守らしめ給え」を唱えて舞い納める。

<p>9 折敷舞 17:55～18:15 (20分)</p>	<p>① 1人 ② 白シャグマ、鉢巻、袴、裷 ③ 扇、刀、折敷、杯 ④ 太鼓、笛、手打鉦</p>	<p>神への献饌に用いる盆を落とさないように持ち、曲芸的な所作をする、備後神楽に特徴的な舞である。 舞手は、盆を落とさないように回転・前後転したり、盆や刀の上に杯を載せて落とさないように舞ったり、扇を片足の指先で挟んで盆を落とさないようにして回転したりと、曲芸舞を行う。</p>
<p>10 布舞 (荒神舞) 18:15～18:35 (20分)</p>	<p>① 4人 (舞手3人、神職1人) ② 烏帽子、格衣、袴、白布、裷 ③ 鈴、御幣 ④ 太鼓、笛、手打鉦</p>	<p>荒神祭の最後の舞で、神託を授かる舞だとされている。昔は神がかり託宣があったが、現在は行われていない (現在の舞手はの中で神懸かるという認識はない)。この演目は、基本的に世羅町内の荒神祭でのみ奉納される。 舞場に白布を舞手の肩の高さでクロス状に張り渡す。白布を肩から斜めに掛けた舞手3名は、幣と鈴を持って祭場の中央で円座になり、鈴を鳴らしながら荒神の来臨を請う神歌を歌う。続いて立ち上がり、布の下をくぐりながら時計回りに回りつつ、布と布の間のスペースで舞う。 その後、鈴を置き幣を襟に挿した3人は、両手で張り渡された白布を握り、祭文を唱えながら前後に揺らしていく。時計回りに移動して握る位置を変えながら次第に激しく揺らしていき、最後に中央で布に絡みつくようにもたれ合いしゃがみこむ。 そこに神職が現れ、3人のもとへ寄り拝礼し祝詞を奏上、拍手して拝礼した後、手に持つ笏でそれぞれの肩をポンポンと叩く。すると舞手は、「静かなれ」との神歌を歌いながらゆっくりと立ち上がり、襟に挿した御幣を持ち一礼して終了する。</p>



折敷舞



勧請の舞



布舞



五行祭 (弓場の弓術指導)

以上の次第で、神楽奉納が終了した。終了後、荒神を祀る家の代表者は、祭祀する神数の分だけスボ（荒神幣）を持ち帰る。

※ 平成二年の記録（佐々木太朗「小國傳承神事 荒神祭龍巻き作り方手引書」）によると、「五行祭、能舞に続いて『神わび』といわれる三人舞、造花引きがあつて最後に『龍引き』の占い行事がある。昔は小国が上と下の二組に分かれて引き合いに勝った方が豊年であると競ったものである」とある。今回はこの「龍引き」の行事は実施されなかった。

○三月一七日（月） 一〇時～一〇時三〇分 荒神納

翌朝、神社に役員が集まり、藁龍を荒神祠に納める荒神納が実施される。翌日に行うと決まっているわけではなく、荒神祭終了後、当日のうちに藁龍を境内の御神木に巻き付けていた時期もあった。

一〇時過ぎに、藁龍のうち一体（雌・吽形）を神楽殿から下ろし、両化八幡神社裏の森の中にある荒神祠へ運んでいく。一同で拝礼した後、祠の背後にある檜の太木に巻き付け、頭部を祠の屋根に据える。

残りの一体（雄・阿形）は、後日、中央大宮神社の荒神に納める。雌雄どちらの藁龍をどの荒神祠へ納めるのかは決まっていないそう。

地区で祀る神社境内の荒神社とは別に、各家で祀る荒神は、その家の代表者（当主など）が持ち帰った荒神幣をそれぞれの荒神に捧げる。

たとえば、荒神祭執行委員長補佐の小迫高氏は、①屋敷裏の荒神（シラカシの木が目印だったが、台風で倒れたため現在は石碑を立てている）、②裏山の中に生える檜の木の荒神、の二箇所にもスボを供える。

各家の荒神は、屋敷の近所や山中の太木、道の曲がり角、川のほとりなどの自然物に祀ることが多く、祠や石碑などがある場合は少ない。多い家では、七、八社の荒神を祀るが、世代交代などで忘却される傾向にある。

## ロ 設備・道具

### ◇藁龍

雌雄一対を制作する。頭と胴をそれぞれ分担して作り、つなぎ合わせる。



荒神納の様子（両化八幡神社裏の荒神祠）



小迫家の屋敷裏の荒神に納められたスボ（荒神幣）

氏は、前回両化八幡神社で実施した十四年前の写真を見ながら、地元作成の図面資料を基に、前回と同じように制作する。習熟者（女性の習熟者もいる）の指導のもと、四〇名ほどで制作に当たる。

### 【準備工程】

①束になった稲藁（牛を飼育する家から提供）の先端を足踏み脱穀機にかけて、ハカマ（枝葉）を取り除き、茎だけにする（「藁そぐり」という）。②藁を木槌（掛矢）で叩き、茎を柔らかくする。

【頭部】上顎、下顎、舌をそれぞれ雌雄一対分制作する。基礎となるのが「組子」と呼ばれる細長い藁の棒で、芯縄に沿って藁を直径約5cmの太さに束ねて結び、順次継ぎ足して二尋（約二・八m）の長さにする。この組子を四本（舌は三本）編み込み、楕円状の部品を形作る。

- ・ 上顎：長さ約九〇cm・幅約四五cm
- ・ 下顎：長さ約八〇cm・幅約四〇cm
- ・ 舌：長さ約七〇cm・幅約二五cm

右記の三部品を結び合わせて頭部とする。雄は口を開き（阿形）、雌は口を閉じる（吽形）。雌雄とも、髭二本（長さ約七〇cm、左縷の縷）、耳一對（四本の組子）を付ける。

【胴部】胴体は全長八尋（約一二m）。芯縄一筋に直径一〇cmほどになるよう藁を巻き付ける。これを雌雄各三本、計六本を作る。三本を左縷に編んで一体の胴体とする（これを「龍ねじ」と呼ぶ）。

【頭部と胴部の接合】接続部分に藁を巻き、藁縄で縛って固定する。

【飾り付け】神楽殿の上手の柱に雄（阿形）、下手の柱に雌（吽形）の頭部を掲げ、それぞれ神楽殿の建物沿いに這わせるように巻き付ける。藁龍を伸ばした神楽殿の奥側で、尾が重なり合うようにする。

#### ◇ホゴ（ユグリ）

藁で蓋つきの円形の入れ物を二つ作る。今回は、一四年前に制作したものを手直しして再利用した。ホゴの中に小タツ・御幣・五穀を入れ、小タツの頭部を蓋から外にはみ出すようにして、神楽殿の正面左右に据える。

#### ◇スボ（荒神幣）

藁を縷って約七〇個制作する。全長約六〇cm。藁を束ね、根元部分を折り返して袋状にし、後日その中に五穀を入れる。その上部は二つに分け、それぞれ左縷に縷い、先端部分で結ぶ。後日、役員が笹竹の軸と御幣を取り付け、荒神幣となる。両化八幡神社での荒神祭終了後、各家の荒神に供えられる。昔に比べて地区内の荒神社は減少している。

#### ◇造花（天蓋・みどり）

神楽殿の天井に紐で吊るされる祭具。「造花引き」では上下左右に揺り動かされる。割竹で円形の枠をつくり、中心部には米の入った袋が取り付けられる。枠の周囲に一二枚の透かし切りが施された切紙を貼り、切紙には五色の紙垂を付けられる。内部にも五色の紙垂を垂らす。造花から四方八方へ亀や鯛など縁起物が切り込まれた紐状の「千道」が引かれる。



藁龍の首にかけられるホゴ



スボ（荒神幣）



造花と千道

## 六 組織

◇小国地区荒神祭執行委員会（荒神祭祀・準備・資金負担を担当）

小国地区（大字小国）に鎮座する四社（菅原神社、祇園神社、中央大宮神社、両化八幡神社）の氏子は九〇軒ほど。荒神祭の儀式は、七年毎に中央大宮神社と両化八幡神社で交互に実施するが、祭りは地区全体のものである。執行委員長は、その年の祭場となる神社の総代長が務める。なお、宮司などの神職や神楽太夫は、執行委員会に入っておらず、地区住民のみで構成される。

◇備後神楽社中（神楽奉演を担当）

世羅町域では、神社祭祀に際して氏子が演者を雇って神楽を奉納してもらうという慣例がある。そのため荒神祭の神楽も、近世期は神職、大正昭和期は本手ほんてと呼ばれるプロの神楽太夫（個人事業主の職業的神楽師）が中心となつて演じてきた。本手の神楽太夫は、神楽団のような固定した組織を形成せずに、神楽の依頼を受けるとその都度近隣の本手神楽太夫を集めて演じた。現在は各地に備後神楽を演じる神楽団ができたため、荒神祭や五行祭を演じる場合は、本手神楽太夫から教わった神楽太夫が安芸東部を含む備後各地か

ら集まって演じることが一般的である(神楽団に所属している神楽師もいる)。  
今回の荒神祭は、竹廣浩二氏(三次市上田町)が中心となり、三次市(上田町・甲奴町)三人、世羅町二人、府中市一人、三原市一人、東広島市(豊栄町)一人の合計八人の神楽太夫が集まって演じた。近年までは、三次市吉舎町の本手神楽太夫の青木氏が中心となって演じていたという。

## 七 由来

荒神祭の由来は明らかでないが、文政三(一八二〇)に作成された「国郡誌御用二付下しらへ書出調」には、小国地区をはじめとする世羅町内での荒神祭祀の様子が記載されている。たとえば、世羅郡津口村では、村内に祀られる荒神四九社に対して「七ヶ年振二壺度宛、村中荒神ヲ野原社へ勧請仕、神楽ヲ奏シ来申候」「佐伯編 平成十 四七九」との記述がある。少なくとも近世後期には神楽を伴う荒神祭祀が実施されていたことがわかる。

## 八 付近の類似のもの

世羅町一帯では、地区住民により荒神祭が実施されている。神楽奉納はなく、藁蛇製作と祭典のみの地区もあるが、世羅町教育委員会による調査では、平成二十四年の時点で以下の地区で実施されていた。

本郷字西川、田打、山中福田、津口、赤屋、西神崎、徳市、井折、小谷、長田、伊尾(大仙社荒神祭・出雲神社)、黒淵、黒川

荒神祭では、基本的に備後神楽が奉納される。その演目は、東広島(豊栄)や御調、三次南部、備後府中など近隣一円と共通する。招かれる備後神楽社中の神楽師も、世羅のほか三次南部、豊栄、府中など近隣から集まる。

## 九 記録類

・DVD「世羅町に残る藁蛇を伴う祭事」世羅郡文化財協会制作・世羅町教育委員会協力、有限会社創意、平成二十六年

・「小国の荒神祭」『世羅西風土記』世羅西町文化財保護委員会編、世羅西郷土研究会、平成四年

・『世羅郡下調べ書出帳集成…芸藩通志編集資料』佐伯道之編、私家版、平成十年

・『郷土の神楽 東広島・賀茂地方』景山英俊、雷八幡神社、昭和五十年

・『広島県無形文化財 郷土芸能 五行の神楽』下引地一二、中国観光地誌社、昭和五十四年

・『神楽大夫…備後の神楽を伝えた人びと』田地春江、岩田書院、平成七年

・『備後神楽…甲奴郡・世羅郡を中心に』田中重雄、八幡神社、平成十二年

・『中国地方民間神楽祭祀の研究』三村泰臣、岩田書院、平成二十二年

・『備後地方の神楽と荒神祭』『広島県文化財ニュース』(三二〇)三村泰臣、広島県文化財協会編、平成二十五年

・『中国・四国地方の神楽探訪』三村泰臣、南々社、平成二十五年

・『神楽』『豊栄町史 近現代編』谷川春夫、豊栄町教育委員会編、豊栄町、平成十六年

・『古文書記録集(二七) 神楽の盛衰(世羅郡を中心として)』國正利明、私家版、令和三年

(鈴木 昂太)

37 いのはなまはちまんじんしゃ  
猪鼻山八幡神社の渡り拍子

一 名称

渡り拍子（拍子、神儀、神儀楽とも呼ばれる）

二 文化財指定等の状況

未指定

三 伝承地

神石郡神石高原町有木 猪鼻山八幡神社（旧神石郡豊松村有木）

※有木地区は、旧豊松村の五つの大字（有木、上豊松、笹尾、下豊松、中平）のうちの一つ。有木地区には氏神社が二社あり、猪鼻山八幡神社はそのうちの一社で、現在の氏子数は約八〇戸。

四 上演の機会及び場所

イ 上演の機会

猪鼻山八幡神社秋季例大祭

毎年十一月の第一日曜日（かつては十一月二日、三日）

令和六年は十一月四日（月・振替休日）に実施

ロ 場所

当屋から神社まで氏子地域内を巡行の後、神社境内や御旅所で奉納。

令和六年は、当屋（有木老人集会所）から猪鼻山八幡神社へ巡行し、

境内・御旅所で奉納した。昔は、当番組の家なども回っていた。

ハ コロナ禍の影響

令和二・三年は、神事のみで拍子奉納は中止。令和四年から再開。当屋での行事（飲食・打ち出し）を含め、完全に復活したのは令和六年から。

五 行事次第、芸能の構成、演目、芸能その他

イ 行事次第、芸能の構成及び演目

《令和六年の祭礼の行事次第、構成、演目》

○祭礼全体の行事次第

十一月三日（日） 宵宮祭、神楽奉納

宵宮に参詣した当番組の総代は、神霊を遷した当番幣を受け取る。当屋の奥の間に祭壇を設けて当番幣を安置し、供物などを供えて一晩祀る。

十一月四日（月・祝） 例大祭

八：〇〇～八：二五 当屋（有木老人集会所）前の広場にて「庭打ち」

八：三〇～九：三〇

集会所にて、当番組（一組）による拍子奉納者への接待

※昔は民家が当屋となり、組員の手料理で接待したという。現在は仕出し弁当とおにぎりなどが出される。

九：四〇～一〇：二〇 「道行き」

当屋から神社の馬場尻まで、当番組の役員が持つ当番幣・大番幣を先頭に、行列を組んで演奏しながら巡行する。

一〇：三五～一〇：四〇 馬場尻にて「拍子迎え」

神社から神職と氏子役員（三名）が出迎えにくる。拍子奉納者は、神職からお祓いを受け、その年に不幸のあった家の人は塩で清めの儀礼を受ける。その後、氏子総代よりお神酒の接待を受ける。

一一：〇〇～一一：一五 馬場尻から境内（宮庭）まで「神迎えで打込み」

行列は、演奏しながら移動するが、その際に三か所で止まって演奏してから鳥居をくぐって境内へ入り、拝殿前で演奏する。

一一：一五～一一：四〇 「宮巡り」

行列は、演奏しながら社殿を時計回りに三周する。演奏終了後、当番幣は神職に渡される。

一一：〇〇～一二：一〇 例大祭祭典



当屋前での「庭打ち」



馬場尻から境内まで「宮庭への打込み」



行列で移動しながらの演奏



御旅所にて「庭打ち」

一二〇五〜一二二五 拜殿前の宮庭（境内）にて「庭打ち」

太鼓を地面に据え置き、拍子子が太鼓のまわりで踊りながら演奏する。

一二三〇〜一三三〇 昼食休憩

一三三〇〜一四〇〇 宮庭（境内）にて「産食打ち」  
さんじき

一四〇〇〜一四二〇 神輿への神遷しの神事

一四二〇〜一四二八 宮庭から御旅所へ渡御「神迎えて打込み」

拍子と神輿の行列は演奏しながら馬場尻へ移動。その後、三か所止まって演奏して御旅所へ入り、一段下の広場で更に太鼓を置いて演奏する。なお、神饌を入れた櫃は先に担がれて御旅所へ着き準備されている。

一四三三〜一四五七 御旅所神事

一四四五〜一四五七 御旅所にて「庭打ち」

一五〇〇〜一五〇五 御旅所から宮庭へ還御「帰り神祇打ち」

拍子と神輿の行列は演奏しながら神社へ移動。その際には、「道行の豊年拍子」を打つ。

一五〇五〜一五二〇 神輿から本殿への神遷しの神事

一五二五〜一五三五 宮庭（境内）にて「庭打ち」

○渡り拍子の構成

（午前・道行きの行列）

トウバンベイ（当番幣）・オオバンベイ各一、獅子二、ハグマー、頭取（拍子木）三、太鼓ニカラ（各四名の拍子子が一つの太鼓を打つ、道行きでは竹の棒に太鼓を吊るして前後二名で担ぐ）、鉦五（竹の棒に鉦を吊るして二名で担ぎながら叩く）。かつてはシャグマをつけた（仮面はなし）猿田彦も出た。

（午後・神幸行列）

神幸では、午前の渡り拍子の後ろに、社名旗、大幣、長刀・槍・弓、楽人、神役、神職、神輿が続く。昔は、巫女、神馬も続いた。

（庭での奉納時）

獅子二、ハグマー、頭取（拍子木）三、太鼓ニカラ（各四名の拍子子が一つの太鼓を打つ、太鼓は台座に載せて地面に固定）、鉦五（竹の棒に吊るして二名で担ぎながら叩く、一台は境内の台座に固定して一名で叩く）。太鼓を叩く拍子を中心に、鉦や獅子、頭取、ハグマが囲う。

○演目

当屋から馬場尻まで移動時の「道行き」、神社や御旅所へ行く際の「神迎えて打込み」、御旅所から神社へ帰る際の「帰り神祇打ち」、神社本殿の周囲を廻る際の「宮巡り」、神社境内正面や御旅所神輿の正面で太鼓を地面に置いて打つ「庭打ち」、昼に新穀を食べてその喜びを表し踊る「産食打ち」などがある。

それぞれのパートは、当屋での「庭打ち」が、神楽の打ち出し↓ザユザン↓小口舞い↓ひざおり↓舞分け↓新免↓廻り打ち↓打ち切り、「産食打ち」が、大夫神楽↓シツカラヤット↓チンチン掛↓盗み打ち↓打ち切りといったように、細かく区切られて認識されている。

ロ 設備・道具

長胴太鼓一つを拍子子四人が叩く。この太鼓と拍子子のセットを「カラ」と呼んでいる。昔は太鼓が四カラ出ることもあったが、近年は二カラ。

太鼓を打つ撥を「バイ」といい、バイ一本に白い房が二つ付いている。拍子子は、バイの真ん中を持ち、房がない木の棒の部分で太鼓を叩く。

鉦は直径約四〇cmで、重量は三〇〜四〇kgにもなり、竹の棒に吊るして前後二人で支えながら打つ。鉦を叩く「ツチ」は、鉦が割れないように、柔らかなカズラの蔓で作られている。令和六年は、五個の鉦を使用。かつては八個使った年もあった。

頭取は拍子木二個を手に持ち、歌いながら指揮したり、叩き合わせて合図したりして調子を取る。また、「ハグマ」と呼ばれる長い木製棒の先端に紙の房をつけたものを持ち、上下させて調子を取る。ハグマは、大名行列に登場する毛槍と似ており、影響関係がうかがわれる。

行列には、当番幣とオオバンベイを持った人が随行する。特に芸術的な所作はしない。当番幣は、紙垂を木の幣串に挟んだもので、神社が用意する。オオバンベイは、木製の三叉矛に白い和紙の装飾をつけたもの。



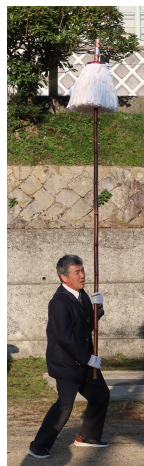
ツチで鉦を叩く様子



バイで太鼓を叩く様子



行列の先頭に立つ獅子



左から「ハグマ」「オオバンベイ」「当番幣」

## ハ 役名・扮装

拍子子ひょうしじ…太鼓を叩く踊り手は、地域在住、もしくは出身者の子供（子や孫、親戚）で、中学生以下の者が務めてきた。かつては伝統的に男子が務めていたが、一五年ほど前から女子も参加している。また現在は、少子化のために大学生や大人も不足を補って務めている。

拍子子は、手拭いで頬かむりをしてから、黒いシャグマをかぶり、後頭部から熨斗飾りをつけた五色の布を垂らす。上半身は花柄の胴着をまとい、たすき掛けをする。下半身は各自で黒いズボンを履く。拍子子のシャグマは、黒い尾長鶏の尾羽根で作られている（豊松村内でシャグマを持つている拍子好きの人や旧家などから借用する）。かつては鎧を身に着けていたが、現在は付けておらず他の道具とともに神輿庫に保管している。

鉦・青・壮年の男性が務める。特に資格や服装の規定はない。

獅子・青・壮年の体力がある男性が務める。特に資格などはなく、先輩からそろそろお前の番だなど言われて任される。特別な衣装はなく、白系の服に黒いズボンを履く。獅子頭は、赤地に金で縁取りされており、白シヤグマ・黒シヤグマの二頭。幕は黒色で背中部分が白黒の縞模様。

頭取…礼服を着た年配の男性が務める。拍子木を叩いて合図を出したり、かけ声や歌を歌ったりして演奏を指揮する統括役である。

ハグマ…礼服を着た年配の男性が務める。拍子に合わせて手に持つハグマを高く振り上げたり、回転させたりして音頭をとる。

当番幣・オオバンベイ…当番組から出る。礼服を着て行列に随行する。猿田彦…約三〇年前までは若者が素面にシャグマを付けて行列に参加。

## ニ 芸態

渡り拍子の芸態は、行列を組んで太鼓を持ち運びながら移動する場面と、太鼓を地面に据えて演じる場面の二つに大別される。

（行列での移動時）

演者は、「渡り拍子の構成」で述べた順番で並び、ゆっくり歩きながら演奏すると、止まって演奏するのを繰り返しながら進んでいく。拍子子は、担がれて移動する太鼓の左右前後に立ち、歩きながらバイで叩く。入れ替わったりする所作もある。鉦は、竹の棒を担ぎながらツチで叩く。獅子は一人立で、手に持つ獅子頭を拍子に合わせて高く振り上げ左右に振る。行列が進む時は前を向くが、行列の停止時は後ろを向いて太鼓を見ながら舞う。道中では、参拝者の頭を嚙んだりする。頭取は、太鼓と鉦のまわりで後ろ向きに歩きながら、拍子木を頭の上で打ち鳴らしたり、振り上げてから胸のあたりまで振り下ろす所作を繰り返したりして、太鼓と鉦に叩くタイミングや叩き方（面か縁かなど）を示す。ハグマも拍子に合わせて高く振り上げたり回転させたりして、音頭をとる。基本的に歌詞はないが、「豊年ノー 豊年ノー 豊年拍シャー」「ヨオーイモ ソオーリヤー」などと獅子言葉を頭取とハグマがかけて、拍子をリードしていく。

（太鼓を固定して演奏する時）

拍子子は、太鼓の四隅に一人ずつ位置し、座りながら両手に持つバイで打つ。前後入れ替わったり、その場で回転したり、太鼓から距離をとり勢いをつけて駆け寄りながら打つたりと、曲芸的なバチさばきをすることもある。伝承者はこれを、鶏が踊り跳ねている姿、鬪鶏を思わせる踊りぶりとして表現している。獅子は二人立ちになり、一人が幕の中に入ってもう一人が幕の裾を外から持つ。前の人は足を大きく開き、獅子頭を大きく左右上下に振る。後ろの人は、前が獅子頭を下げる動きに合わせて幕が地面に付かないようフワツと持ち上げる。同じ場でこの動作を繰り返すが基本だが、獅子が頭を振りながら拍子子のまわりを歩いて反対側へ移動することもある。なお、令和六年は、二頭の獅子のうちひとつは人員不足のため幕を腰に巻きつけて一人で同じ動作をしていた。音頭とハグマは行列の時と同じである。

## 六 組織

猪鼻山八幡神社拍子保存会（猪鼻山八幡神社社務所）

渡り拍子は、猪鼻山八幡神社の氏子有志が奉納してきたもので、経験者の指導統率のもと拍子子を務める子供が中心となる有志の組織であった。

昭和五十六年十月一日、敬神の念を高め、拍子の永年伝承することを目的として拍子保存会が結成された。初代の会長に元猪鼻浜八幡神社責任役員の小坂圭一郎氏が就任、現在は二代会長の元猪鼻浜八幡神社責任役員岡崎薫氏が務めている。昭和六十二年五月三日、福山市天満屋屋上での郷土芸能発表会に参加して注目を集めた。拍子の奉納に当たって神社から補助を出すなど、保存会は神社と一体的に運営されている。

渡り拍子の芸能は、年長者、習熟者から伝習される。例年、例大祭の一月前から土曜日に三回練習を行うが、祭りの現場で先輩が新入りに指示したり、教えたりしながら踊る姿もよく見られた。

拍子の演奏団体とは別に、神社祭礼の当番組がある。猪鼻山八幡神社の例祭では、氏子（約八〇戸）が八組に分けられ、年ごとの輪番で当屋での拍子への接待や当番幣の祭祀などを担ってきた。なお、氏子数減少により、現在は七組で輪番となっている。令和六年の当番組は一組（六軒）であった。

## 七 由来

芸能の由来を記した古文書などの記録類は残っていない。昔より、氏神社の例大祭の当日に、悪魔退散・新穀感謝・豊作祈願の趣旨で奉納されてきた。

第二次世界大戦の終戦までは、神幸行列に参加した二頭の神馬が競馬をしていた。また、昭和四十年頃までは、神社前の参道で流鏝馬があり、「馬場尻」の地名はそれに由来すると考えられる。その代わり、昭和五十六年から大國舞を演じて紅白の餅撒きをしてきたが、現在はそれもなくなった。昔の渡り拍子は、現在よりも人数が多く派手だったが、現在は少し簡素化され、神輿も小型のものを使用。子供の巫女の舞（榊舞・浦安舞）も数年前から休

止している。

## 八 付近の類似のもの

複数の着飾った子供が一つの太鼓を踊りながら叩くのに鉦の伴奏や獅子舞などが付随する芸能は、広島県東部・岡山県西部・鳥取県西南部の中国山地を中心に、多様な名称・形態で広く伝承されている。

たとえば、神石高原町内には油木の神儀（県指定）、豊松の神事（渡り拍子）（県指定）のほか、類似の芸能が伝わる。ただし、拍子や衣装は各地区によって異なる。隣接の庄原市では、西原八幡神社神儀（市指定）をはじめ、神儀・楽打・太鼓打ちなどの名称で伝承されている。三次市内には、塩貝八王子社大神楽極打太鼓（市指定）など、府中市では矢野の神儀（県指定）などがある。また、東広島市の吉原神儀、世羅町の黒川神儀（町指定）などが挙げられるが、瀬戸内の沿岸部ではなく吉備高原に多く伝承が見られる。

その他、岡山県西部には渡り拍子・楽打ち・頭打ちという名称で同種の芸能が伝わっている。鳥取県日南町にも、日南のかしら打ち（県指定）として二事例が伝承されており、備後から伝わったとの言い伝えもある。

## 九 記録類

・「猪鼻山八幡神社 奉納 祭り口拍子」拍子保存会所有

※ 太鼓や鉦の叩き方を音で示した口拍子（口唱歌）や踊りの動きを記録したもの。昭和五十三年二月二十五日に頭取と宮司により書き起こされ、令和四年に拍子保存会により改定された。

・『氏子の皆さんと氏神様奉仕六十年の歩み』次重春雄、創栄出版、昭和六十三年

・『有木物語』次重寛禧、吉備人出版、平成三十年

（鈴木 昂太）

